

自校文集「村の子供」(騰寫)を編んでからも二三年の月日は流れた。

子供等は之を土臺としてけなげにも奮闘を續け、小さな自己を築くに忙しかつた事は私にとつて本當に涙ぐましい程の感激であつた。其の心の跡は其まゝ過去として葬り去るには餘りに惜しい。

かうして私は「村の子供」の續篇を編むべく已むなくされたが、此機會をもつて、一層の事、以上を打して一丸としたものを作り、遺憾なく頒たうが為、茲に印刷に附する事にした。

村の子供！ 何といふ小さい淋しい名だ。

それでも、其處には子供ばかりの、田舎ばかりの、其處相應な世界が開かれて居て、夫に適はしい生活が營まれてゐる。賑かさ花々しさには乏しいが、静けさ長閑さの間に溢るゝ計りの純眞さと、深淵さが殆んど永劫に續く豐富を持つて彼等を圍んでゐる。そして彼等でなければ味到し得ないこの世界の鍵を、自らの力によつて握つた彼等は、其幸福に恐悦するであらう……と共に「君達よ」と都の友たちに呼びかけずには居られない焦燥を感ずる。

田舎の子供の綴方は田舎の土に咲いた花である。「地理」に根を下し「歴史」に育てられて、かう咲くより外、どうにもならなかつたのである。

青い山の中に、稻のそよぎの中に、鳥の歌をきゝ蛙の聲をきゝ、石や草花や棒切を玩具とし、藁葺の家に親子膝つき合せて育つて來た……そこにはそこしか見られない心の生活があつた。

電車に乗り、石造の家に住み、水道の水のみ、セルロイドやブリキの玩具で育てられたとは又違つた生活があつた。

子供は大人になる準備の人ではない。大人とは異つた人である。子供には獨立した子供の生活がある。眞にすばらしい驚異すべき世界がそこに開かれてゐる。そして愛が、純情が、如何に放膽に深淵に編滿してゐるかを見る時、吾々はそこに耻づべき吾五尺の軀を發見し、寧ろ跪かん心を抑へる能はざるものがあるではないか。かうした處から生れた藝術が大人のそれより、低いとどうして言はれよう。吾等は其、人の大小を見ず、只其純眞の輝を見るのみである。

全國の綴方も彼等には珍らしい音づれとしては響くが人馴れしない彼等の胸を打つ力は弱い、彼等は眞に此處にのみ彼等だけの本當の藝術の世界を發見する。然し其藝術は——全國一般と——共通の根をもつてゐるものであるから、徐々其範圍を廣めて行つてやがては一致する、今其途上にあるのである。此意味に於て私自身の仕事として彼等の出發に驢するものは此「村の子供」しかない。

此集に現はれたものは思想的には眞に低級であり、智的に貧弱である。語彙も不足、漢語にも熟してゐない。然し夫丈に生れ儘の素直さ大膽さといふ強みがある、私はせめて、これ丈でも素直にいぢけさせないで育て哺んで行きたいと念じてゐる、「功利」が伸べる「妥協」の手を勇敢に拂ひ除ける、正しき事の前に何事も恐れぬ、勇氣と純情の美しさを、永遠に彼等の貞操とし至寶として保たしめたいとひたに念じてゐるのである。

(編者)